

安倍応援団 「神社界」が大揺れ



天皇陛下を非難する前代未聞の不祥事で昨年十月末に引責辞任した靖国神社前宮司の小堀邦夫氏が、再び物議を醸している。「靖国神社宮司、退任始末」という冊子を刊行し、今年の創立百五十年記念事業に関する疑惑や資産運用で二十億円が償還不能になっているという驚きの内情を告発したのだ。奥付は辞任一カ月後の十一月末。傷心や反省とは無縁に、せっせと暴露手記を書いていたわけだ。

靖国神社は百五十年記念事業予算を神社拠出金十億円と募金十億円の計二十億円と公表している。ところが小堀氏によると、実際は建物改築などの中長期計画を上乗せして予算は三十五億円に膨れ上がり、昨年二月の宮司就任時には総代会で了承され、施工契約も済んでいた。約四割（十四億円相当）は小さなコンサルタント会社が請け負い、数名の幹部職員が関わっていたという。

また、それとは別に神社の資産運用で二十億円の含み損が発生。外資系証券会社と癒着した担当者は自己資金も入れていたが、実情を総代会に報告したと

ころ「不問に付すしかない」ともみ消したというのである。

いずれも事実なら、カルロス・ゴーン容疑者も顔負けの背任行為だ。靖国総代には、三好達元最高裁長官、葛西敬之JRR東海取締役名譽会長、阿南惟正元新日本製鐵副社長ら錚々たる名士がそろっているのに、どうしたことだろう。

皇室との縁も絶つ考え

小堀氏の執筆意図は何か。斯界の事情通は、手記の冒頭と末尾に読み解くカギがあると指摘する。小堀氏は、全国約八万神社を統括する民間宗教法人・神社本庁トップの北白川道久前総理（元伊勢神宮大宮司、昨年十月急逝）の推薦で靖国宮司に就任したと書く。

そして靖国のガバナンス不全をいくつも並べ立てた上で、「七十年以上も単立宗教法人であり続けるところに隠された、深刻な問題が未解決のまま今日に持ち越されてきた」と断じ、「なるべく早く神社本庁の被包括法人となり、よりよい未来を志向すべき日が、新元号の発布とともに始まらなければならぬ」と結論づける。

現在、単独民営の宗教法人である靖国神社は、いずれ一国にお返しして戦前のように国家管理に戻すことを究極の目標に掲げるが、小堀氏は「目標が立たなくなった」ので、神社本庁傘下の一般神社として生き残るしかないという。それが本庁の狙いであり、自分はそのために派遣されたと読める。

本庁関係者は「就任内定後、北白川氏に挨拶したら激励されただけで、推薦したのは靖国総代の田中恆清本庁総長と、その盟友である神社界の政治団体・神道政治連盟の打田文博会長だ。靖国を本庁傘下に組み入れたいという狙いがあつたのなら、田中・打田両氏の思惑だろう」と背景を解説する（昨年の本誌十一月号参照）。

靖国宮司は戦後も皇室との縁をつなぐため、基本的に旧華族の親睦団体「霞会館」から選ばれた。間接的に天皇の意向も反映された「暗黙の勅裁」とされ、そこに一般神社とは別格の単立法人であり続ける意義が込められていた。

しかし、小堀氏の前任の徳川康久元宮司が任期途中で放逐され、霞会館がそっぽを向いたので、人

波紋は靖国だけでなく神社本庁にも広がっている
(手記を書いた小堀邦夫・前宮司、右写真)



選は本庁頼みとなった。小堀氏「派遣」に本庁が靖国を傘下に収める野望が秘められていたなら、小堀氏の天皇批判も辻褄が合う。もはや国にお返しする気のない一般神社になるということは、皇室との特別な縁も絶つことを意味するからだ。小堀氏の「陛下は靖国を潰そうとしている」という暴言は、確信犯の本音だったことになる。

折しも神社本庁内部で、靖国問題と軌を一にするような皇室軽視の騒動が続いている。本庁の不動産を不当に転売した疑惑がマスコミに追及され、内部批判にさらされた田中総長が昨年、一度は辞意を表明しながら前言を翻して居座った。事態を憂慮する鷹司尚武統理が田中氏に潔い出処進退を促すも、田中氏はこれを無視。あろうことか逆に統理を辞めさせようとしているとされる内紛である。

鷹司氏は、かつて摂政・関白を独占した五摂家の一つ、鷹司家の第二十八代目当主。戦後設立された神社本庁初代統理や明治神宮宮司だった鷹司信輔氏の孫。昭和天皇の第三皇女・元伊勢神宮祭主の鷹司和子氏の養嗣子。今上天皇の義理の甥にあたる。慶應義塾大学大学院修了のエンジニアで、NEC子会社の社長を退職後、一昨年まで十年間、伊勢神宮大宮司を務め上げ、第六十二回式年遷宮(二〇一三年)や主要七カ国(G7)首脳らの内宮参拝(一六年)など大きな功績を残し、引退後の慣例で昨年六月、統理に就いた。皇室との縁はもちろん、民間のコンプライアンス(法令遵守)にも通

じた見識・経験豊かな重鎮である。昨年九月の役員会で辞意を公言した田中氏が、打田会長や取り巻きたちの慰留で前言を翻すと、鷹司氏は面と向かい「覆されたことが私は気持ちが悪いですね。上に立つ人、組織の長は言ったことには責任をもって後進を導いていただきたい」と苦言を呈した。全国の神社の代表約百六十人が集まった翠十月の評議員会で田中氏が「(今年八月まで)任期を全うする」と宣言すると、鷹司氏は「それがまかり通るなら神道の精神が見えなくなる」と発言した。十二月の役員会で理事たちから鷹司氏との話し合いを求められた田中氏が「意見の対立はない」と突っぱねると、鷹司氏は「私は週三日出勤しているが、総長と話す機会がない。私の方から訪ねてもいい」と水を向けたが、田中氏は目も合わせず黙る有り様だ。田中氏の異様な強気を後押しするのが、神政連国会議員懇談会(約三百議員)の政界人脈を背に隠然と実権を握る打田氏であることは衆目の一致するところだ。今年三月まで三年に一度の改選が進む各

県神社庁人事に手をつ込み、評議員会に「田中総長統投」の多数派工作を繰り返しているという。鷹司氏は前任の北白川氏の残り任期を引き継いだので、五月に改選手続が必要だ。「田中・打田コンビは、非妥協的な態度から見ても、鷹司統理を自分たちに好都合な人物にすげ替える気では」(本庁関係者)との懸念が広がる。田中派職員が陰で鷹司氏を呼び捨てにするなど風紀は荒んでいる。

天皇讓位も改憲もそっちのけ
神社界は今年、今上陛下即位三十年と代替わりの大典に伴う皇室奉祝を掲げるが、中樞には皇室を軽んじる悪弊が浸潤しつつある。田中氏は安倍晋三首相の中核支持組織である日本会議副会長。打田氏は日本会議が主導する「美しい日本の憲法をつくる国民の会」事務総長。安倍政権をと真ん中で支え、改憲機運を醸成すべき国民運動のリーダーたちだが、今年初詣では改憲賛成の署名活動も見なかつた。それどころではない事情があるからだ。神社界の内情は、政権の現状を映す鏡でもある。